シリーズ「共に絆を深める 」③キリストにあって一つとなる　　コリント第一 1:10～17

私たちは、教会は、少なくとも初期の、主イエスの時代からあまり時を経ていない教会は、信仰が力強く生きづいているすばらしい共同体だった、と考えたいし、そうあって欲しいと願います。特に新約聖書の使徒の働きを読むと聖霊が臨んで力強く福音が証しされ、試練の中にあっても救われる人が多く起こされ、教会が成長していった様子を知らされます。ですから、現代を生きる私たちは初代教会から学び、少しでもそれに近付けるように努力していくのだ、と考えたいのです。ところがこのコリント人への手紙を読むと、どうも教会は最初から問題をかかえ、罪があり、いろいろなもめごとがあったようだ、ということが分かります。現在の私たちの間にいろいろなトラブルやもめごとがあるのは、ある程度仕方がない、なにせ私たちは主イエスから二千年も隔たった時代を、また教会が誕生した地から遠く離れた、キリスト教信仰が全くと言っていい程根付いていない日本という国にいるのだから、理想的にいかないのは当然だ。でも、最初の頃の教会までそうであっては困ると私たちはそんなふうに思っているのではないでしょうか。皆さんはどのように理解されるでしょうか？

これは聖書をどのような本であるのかという受け止め方にかかっています。先ず聖書は、教会の宣伝のための文書ではありません。普通、人間がある団体を興したり、あるいはある宗教を始めて、その土台となるような文書を書くとしたら、その団体のよい面、優れた所、ご利益のようなことを書き連ねます。しかし聖書はそういう性格の本ではありません。だからと言って必要以上に人間の醜さ罪深さを「これでもか」と書き連ねて終わっている本ではありません。自分たちの罪を隠したり、認めずに済ませようというのではなく、それをはっきりと見つめ、問題にしています。しかしそれで終わるならばそれこそ何の救いもそこにはありません。私たちの信仰は、聖書から、自らの罪をきちんと見つめ、悔い改めることによって、主イエスの十字架の贖いによって罪赦され、新たな者とされ、常に改革されていくのです。それは昔も今も変わりありません。ですから今日も昼からバイブルセミナーで学びますが現在、私たちが抱えている問題や課題に対しても聖書のみことばが導きと答えを示してくれているのです。

さて、この手紙は本日読んでもらいました 10 節から、本文に入ります。「さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。どうか、みなが一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」。パウロがこのように言うのは、コリント教会に、11 節にあるような事態が起っていたからです。「実はあなたがたのことをクロエの家の者から知らされました。兄弟たち。あなたがたの間には争いがあるそうで」。「クロエの家の者」についての詳しいことは分かりませんが、この人たちから、コリント教会の現状についての報告が、おそらくエペソにいたパウロのもとにもたらされたのでしょう。そこにはそれと共に、コリント教会からのいくつかの質問、信仰に関する問い合わせも述べられていたと考えられます。その質問に答えるような書き方がこの手紙の随所に見られるのです。しかしそれらの質問に答えるよりも先に、パウロが先ず第一に語らずにおれなかったのは、コリント教会の人々の間に争いがある、ということでした。その争いの内容が 12 節に語られています。「あなたがたはめいめいに、『私はパウロにつく』『私はアポロに』『私はケパに』『私はキリストにつく』と言っているということです。」。つまりこの争いは、教会の中にグループ、党派ができ、お互いが、「我々の方が正しい」と言い争っている、ということです。それぞれの党派は頭と仰ぐ指導者をいただいています。「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケパに」「わたしはキリストに」というふうに、パウロ党、アポロ党、ケパ党、キリスト党という四つの党派が生まれていたのです。

パウロ党は、パウロを慕い、その教えを大切にして歩もうとする人々です。この教会はパウロの伝道に

よって基礎を据えられたのですから、パウロを慕い、信仰の師と仰ぐ人々がいたことは想像に難くありません。パウロが去った後コリントにやって来た伝道者の代表がアポロです。この人はユダヤ人であり、聖書に詳しい雄弁家だったとあります。第三の党は「ケパ党」です。ケパとは、主イエスの弟子の筆頭であったペテロのことです。パウロの他の手紙を読むと、ペテロとパウロとの間には、信仰のあり方について、ある違いがあったことが分かります。ペテロは、旧約聖書以来のユダヤ人の伝統的な信仰と生活を尊重し、その土台の上で主イエス・キリストを信じて生きるという姿勢を取ったのに対して、パウロは、そのような伝統的儀式などから全く自由になり、主イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救われ、神の民に加えられる、と主張しました。パウロにとって、救いの根拠は、ユダヤ的伝統ではなく、あくまでもキリストの十字架の死と復活による罪の赦しを信じることでした。コリントにおける「ケパ党」がどのような主張をしていたのかは定かではありませんが、おそらくパウロの教えよりもよりユダヤ的伝統を尊重する教えが説かれていたのだろうと想像できます。

第四の党派として「キリスト党」というのがありました。ちょっと考えると、「パウロ党」「アポロ党」「ケパ党」というのは問題だが、「キリスト党」ならよいのではないか、むしろみんなが「キリスト党」になることが大事なのではないか、とも思います。しかしここでの「キリスト党」は、人間につくのではなく主イエス・キリストにつく、というものではなかったようです。彼らは確かに、我々はキリストにつく、と言っているのですが、そのキリストは、自分たちが勝手に理解したキリストだったようです。彼らは、自分たちは天からの啓示を直接霊感によって受けてキリストを示された、と言っていたのです。

コリント教会には、このようなグループ、党派が生まれ、お互いが自分の正しさを主張して対立していました。そのような争い、仲違いをパウロは真っ先に問題にしているのです。彼の勧告は、先ほど１０節で読んだように、「みなが一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」ということです。パウロはここで、教会の人々が、言葉と心と思いとにおいて一つとなることを勧めているのです。「仲間割れすることなく」とも言われています。「仲間割れ」という言葉は原語でスキスマと言います。それは「破れている」という意味です。本来一つであるはず、あったはずのものが一つでおれなくなることです。パウロは教会がそのような破れ、分裂に陥ることなく、言葉と心と思いにおいて一つとなるように、と勧め教えているのです。

それでは、教会は何によって一つになるのでしょうか。教会に連なる信仰者たちの言葉と心と思いを一つにするものは何でしょうか。そのことが 13 節に語られていきます。「キリストが分割されたのですか。あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか。あなたがたがバプテスマを受けたのはパウロの名によるのでしょうか。」。一人の方であられるキリストが、幾つにも分けられてしまう、あなたがたの間で起っているのはそういうことだ、とパウロは言うのです。逆に言えば、教会が一つであるのは、キリストが一人であられることによるのです。教会を一つとするもの、信仰者たちの言葉と心と思いを一つにするものは、一人の方であられるイエス・キリストなのです。ですから教会における一致は、私たちがお互いの言葉と心と思いをとことんまで突き合わせ、よく話し合い、お互いに譲り合い妥協し合うところに生まれるのではありません。求められているのは、人間どうしの間で折り合いをつけることではなくて、一人の方である主イエス・キリストにしっかりと結びつくことなのです。主イエス・キリストの下でこそ、一致が生まれるのです。党派が生まれ争いが起るのは、みんながイエス・キリストにしっかり結びついていないからです。キリストに結びつくのではなくて、パウロとかアポロとかケパという人間に結びつこうとするからです。あるいは自分と同じような考えを持った、気の合う者どうしで結

び合おうとするからです。自分と気の合うとは結局、自分が一番正しいと考えていることです。人間の考えや好き嫌いの思いによって仲間と一つになろうとするところに、分裂、対立が生じるのです。

しかしさらに考えなければならないのは、主イエス・キリストにしっかり結びつくとはどういうことかです。キリストに結びつくと言っても、そのキリストが、全く自分勝手に見つめられたキリストでしかない場合もある、というのが先ほどの「キリスト党」の例です。そこでは、キリストに結びつくことも結局一つの党派を結ぶことにしかならないのです。ですから、一人の主イエス・キリストに、「正しく」結びつくことを求めていかなければなりません。キリストとの正しい結びつきとはどのようなものなのでしょうか。そのことを考えるためのヒントになるのが、13 節の中の、「あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか。」という言葉です。ここでパウロは自分の名前をあげています。それは自分の名による党派「パウロ党」があり、「わたしはパウロにつく」と言っている人たちがいるからです。あなたがたが見つめるのは私パウロではなくイエス・キリスト、十字架につけられたキリストだということです。キリストを正しく見つめ、正しく結びつくとは、私たちのために十字架にかかって下さったキリストを見つめ、そのキリストと結びつくことなのです。

この十字架につけられたキリストと結び合うことによって、私たちの言葉と心と思いは一つとされます。そこに生まれる群れにおいては、みんなが型にはめられた画一的な者になることなどあり得ません。またいつでも意見が一致していなければならないということでもありません。むしろそこには、隣人の賜物を認め、自分とは違うその賜物を受け入れ、喜ぶということが起っていくはずなのです。自分と人との違いが妬みや批判ではなく喜びに思えるのです。音楽でオーケストラにユニゾンとハーモニーがあります。ユニゾンとは複数の人が同一の旋律を演奏することであり、ハーモニーは複数の人が全体の調和を保ちながら別の旋律を奏でることです。すべての演奏者が最初から最後までユニゾンで演奏したら、単調で退屈な音楽になってしまいます。ハーモニーによって曲の美しさを際立たせることが出来るのです。一人の指揮者の下で、個々の楽器を、旋律の違う楽譜を見ながら演奏するのがオーケストラです。それぞれの演奏家の目標は、自分の音色を目立たせることでも、一番先に演奏を終えることでもありません。「同じ考え、同じ目的で結ばれて、一つ心」になることです。このことが起こるとき、音楽は天の響きを聴かせることになるのです。ハーモニーは調和という意味もあれば一致という意味もあります。教会の目指すのはハーモニーです。それぞれに与えられている様々に違った賜物が生かされ、それぞれに違った奉仕が喜ばれ、信仰における強調点の違いはいろいろあっても、十字架にかかって下さった主イエス・キリストに仕えることにおいて一つである交わりが生まれるのです。パウロもアポロもケパも、それぞれ主イエス・キリストを信じ、その十字架の死による救いにあずかり、それぞれに与えられた賜物によって教会に仕えている人々です。それぞれに特徴があり、優れた点があり、それが教会を豊かにしているのです。それらの人々の働きが党派争いを生んでしまうとしたら、それは教会に連なる者たちが、十字架につけられた方である主イエス・キリストにしっかりと結びついていないからです。そしてそこには、自分の罪や問題をしっかり見つめることができない、ということも起ってきます。それらから目を背け、我々は正しい、我々と違う者たちは間違っている、とヒステリックに主張するようになるのです。つまり、悔い改めに生きることができなくなるのです。私たちが、自分の罪や問題をしっかり見つめ、悔い改めつつ歩むことができるようになるのは、十字架につけられた主イエス・キリストと結び合い、主イエスによる罪の赦しの恵みをしっかりと受けることによってなのです。